

## キリスト者の使命

2009.7.14(火)  
ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

ローマ人への手紙 13章11節から14節

**あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。夜はふけて、昼が近づきました。ですから、私たちは、やみのわざを打ち捨てて、光の武具を着けようではありませんか。遊興、酩酊、淫乱、好色、争い、ねたみの生活ではなく、昼間らしい、正しい生き方をしようではありませんか。主イエス・キリストを着なさい。肉の欲のために心を用いてはいけません。**

今読みました箇所11節は非常に大切です。今日の題名は、『キリスト者に与えられている使命』です。私たちはどうして救われたのか。何のために救われたのかについてです。

ローマ人への手紙 13章11節

**あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。**

救いとは、もちろん「救い主」です。イエス様はまもなく来られます。

今回のドイツキャンプで、私にとり重荷になったことは、「集会の本」のことでした。集会の本の大部分は眠っているのです。それは小諸の倉庫の中です。そして、毎年三百万円を倉庫代のために払います。このことは主の御目から見ると良くないことではないか、と悩むようになってしまいました。「みことば」は「いのちのことば」です。集会の本は、たいしたものではないかもしれませんが、「みことば」が入っているから良いのです。ですから、その集会の本を配らなければならないのではないかと思うようになりました。

そして兄弟たちと相談した結果、みなそのことに賛成したのです。今から集会の本全部を無料にして用いてください。同級生や、救われていない親戚、家族がたくさんいるでしょう。普通は無料だったらたいした価値のないものです。けれど、今まで祈っていた人々に差し上げたら本当に良いと思います。つまり、今こそもっともってイエス様を紹介しなければなりません。ある人は、「私はできません。口下手です」と言うかもしれませんが。でも、本くらいは渡せるでしょう。「読め、読め」と言うと、もちろん駄目です。「今は

読む暇がないでしょうから、半年後でもどうですか」と言ったら、その日に必ず本を開くようになるでしょう。もちろん渡す前によく祈って、期待をもって差し上げたら、主は必ず働いてくださるのです。そして集会の大きなカレンダーもあるでしょう。おそらく今日集まったうちの三分の一くらいの兄弟姉妹は、そのカレンダーが存在していることすら知らないのではないのでしょうか。これは良くないことだと思います。そのカレンダーがたくさん残っているのです。みことばと、(絵を描いたのは集会の兄弟姉妹ですが、)そこには描いた人たちの証しも後ろに書いてありますし、「みことば」は日本語だけではなく、英語でもドイツ語でも書かれていますから、プレゼントとして良いと思うのです。秋に、ドイツの兄弟姉妹のためにたくさん持って行きたいので、夏に御代田へ行く人たちは、(車で行く人も大勢いますから)ぜひ運んで来てもらいたいと思います。みことばは回心の種です。ですから、早く用いましょう。これは、私たちに与えられている使命ではないかと思えます。

結局、いつも考えるべきことは、私たちの心の願いは何であるのか、ということです。また主の心の願いとは何でしょうか。私たちの願いと、主の願いとは同じなのでしょう。

私たちにとって一番大切なことはいったい何でしょうか。それは仕事ですか。自分の興味ですか。自分の集まりですか。自分の奉仕ですか。イエス様が私たちをご覧になられたら喜んでくださるのでしょうか。イエス様のみこころにかなった生活をして、真に主を喜ばせよ、とコロサイ書1章10節に書いてありますが、これこそ最も大切なことではないかと思うのです。

コロサイ人への手紙 1章10節

また、主になかった歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。

イエス様は何を欲しておられるのでしょうか。イエス様の心の願いとはいったい何でしょうか。イエス様は「一人も滅びることがないように」願っておられるのです。よく引用される箇所ですが、ペテロ第二の手紙3章9節を見ると、次のように書かれています。

ペテロの手紙・第二 3章9節

**主は、ある人たちがおそいと思っ**ているように、その約束のことを遅らせておられる**ではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深く**あられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる**のです。**

これは、主のお気持ち、主のみこころの現われそのものです。「一人も滅びない」で、「すべての人が悔い改めに進む」ことです。そのために、本も役に立つのではないのでしょうか。主の願いは、「人間が救われる」ことです。神は、人間を救うためにご自分の最も愛する者、即ち主イエス様をお与えになったのです。

私たちの心の願いは、やはり「人を救うこと」なのでしょうか。この目標を頭に入れていない者は用いられません。イエス様は、私たちが信じれば信じるほど多くのことをなしてくださいませ。私たちがイエス様にどんなに信頼しても、し過ぎるということはありません。「もしあなたが信じるなら、神の栄光を見る」と約束されています。一つのことのはっきりしています。私たちの不信仰のために、イエス様は今までにあまり多くのことをなすことがおできにならなかったということです。

私たちの心からの願いは、いったい何でしょうか。イエス様をもっとよく知りたいことなのではないでしょうか。「本当の祈る人」になりたいのでしょうか。そのための道は、私たちが人のたましいを獲得するために出かけることです。イエス様を紹介するためです。そのために助けになるのは、今話しましたように、集会にある本を、悩み苦しみながら求めている人に差し上げることです。悩んでいない人はいません。悩んでいる人は求めています。その人たちは、自分が何を求めるべきか分からないだけではないのです。ですから、「イエス様を紹介すること」こそ、私たちに与えられている使命なのです。私たちが人を導こうとするとときに、自分の弱さ、無力さをもちろん感じます。でも人間にはできませんから、私たちは祈るようになります。「祈る人になりたい」という気持ちをもつことこそ、最も大切なのではないのでしょうか。

イエス様との生き生きとした結びつきをもって生活しているキリスト者は、たましいの滅びゆく人々に、イエス様への道を指し示す人にほかなりません。「人のたましいを救う」ということが偉大な仕事であるにもかかわらず、主なる神ご自身がこのどうしようもない私たち人間をお用いになって、その仕事をするをお許しになったということ。これは本当に驚くべきことではないのでしょうか。

イエス様はペテロとアンデレに、ついて来るようにおっしゃった時、彼らにはっきり言われました。「わたしについて来なさい。あなたがたを、人間をとる漁師にしてあげよう」と。与えられた使命とはそれです。今まで動物や魚をとる者たちだったのです。けれど、「今から人間をとる漁師にしてあげよう。あなたはできないから、わたしがします」と。イエス様に従っている者は、取りも直さず、イエス様から人をとる漁師として召された者のことだということを、意味しているのです。私たちはこの大切な事実を確信し、自覚しているのでしょうか。

聖書を読むと、いろいろな驚くべきことばが出てきます。一つはイザヤ書55章です。もちろんこのことばは、主と離れているいわゆる異邦人に語られたことばではなく、「主の救いにあずかった人々」に書かれたものです。

イザヤ書 55章8節、9節

**「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、わたしの道は、あなたがたの道と異**

なるからだ。 主の御告げ。 天が地よりも高いように、わたしの道は、あなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

「あなたがた」とは、信じる者のことです。

この箇所は、私たちイエス様を信じる者と主との間が、何らの結びつきも存在していないということを明らかに示しています。私たち信じる者の思いは、常に主の思いと対立するのです。つまり主とつながっていないのです。

多くの兄弟姉妹は喜んで証します。「私はそむきの罪を犯す者でした。羊のように迷っていた者であり、自分勝手な道に向かう者でした」。そのような話を聞くと、失礼ですから何も言いませんが、時々質問したい気持ちになります。「今はどうなのですか」と。

イザヤ書の中によく知られている箇所です。

イザヤ書 43章24節後半

**「あなたの罪で、わたしに苦勞をさせ、あなたの不義で、わたしを煩わせたただけだ。」**

私たちは過去だけではなく、今もそうではないでしょうか。

次に、もう一つの驚くべきことばがあります。イエス様の言われたことばです。ヨハネ伝の6章63節です。短い表現です。

ヨハネの福音書 6章63節前半

**「いのちを与えるのは御霊です。肉は何の益ももたらしません。」**

肉は役に立たない、と。「肉」とは、人間の知恵、人間の力、人間の努力を意味します。そのようなものは、「役に立たない」とイエス様は判断しておられたのです。この箇所は、原典を見ると二重否定になっていることが分かります。この訳ではそこどころがあまりよく表わされていないように思われますが、原典に忠実に二重否定の表現を使うならば、「肉は決して、決して何の益ももたらしません」というように表現できるでしょう。すべての思いや行ないというものは、全く何の価値ももっていないということです。つまり、ことばを変えて言えば、御霊の働きによらないものはすべて例外なく、肉から出ているものである、とすることができるでしょう。すべて人間的なものはこの世的であり、悪魔的である、と聖書は語っているのです。

初めは御霊で始まったにも関わらず、肉によって完成されるという信者が少なくないのではないのでしょうか。

イスラエルの最初の王であるサウルは、結局肉によって完成された信者の一つの実例なのではないのでしょうか。初めはやはり主に喜ばれたい。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」。この態度をとったのですが、後になって聞く耳を持たなくなってしまっ、彼の最後は悲劇的でした。自殺してしまっったのです。

ガラテヤ地方にいる信者たちも、そのようになりそうになったのです。ですからパウロは、この手紙を書いたのです。どうしても必要だったからです。

ガラテヤ人への手紙 3章3節

**あなたがたはどこまで道理がわからないのですか。御霊で始まったあなたがたが、いま肉によって完成されるというのですか。**

ですから、御霊で始まることが大切だけではなく、むしろ「御霊によって歩む」ことが大切です。5章16節を見ると、次のように書かれています。

ガラテヤ人への手紙 5章16節

**私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。**

ガラテヤ人への手紙 5章25節

**もし私たちが御霊によって生きるのなら、御霊に導かれて、進もうではありませんか。**

私たちが「主の光」の中に、私たちの生活を見ることができ、自分が盲目であることに驚き、心からの悔い改めをすることによって、主の豊かな祝福にあずかることができるように、心からお願いいたします。

何としばしば私たちは、絶対に悪いとは思わずに、主のみこころに反することをしています。かつてイエス様は、弟子たちに向かって言われました。「しばらく休みなさい」。こう言っておられます。的確なことばです。当然の話ですが、人が休む時間というものには確かにありますし、必要です。

けれども、それと同時にイエス様は、同じ弟子たちに対して全く違うことを言われたことがあります。「まだ眠っているのですか。まだ休んでいるのですか」と。その時は、眠ったり休んだりしている時ではなく、目を覚まして祈り続けなければならない時でした。しかし、イエス様がそう言われても駄目でした。イエス様は死ぬほど苦しまれたのに、弟子たちは眠ってしまったのです。信じる者はみな、そのようなことを経験しているのではないのでしょうか。

例えば、モーセの跡継ぎであるヨシュアについて、次のように書かれています。旧約聖書になります。

ヨシュア記 7章10節

**主はヨシュアに仰せられた。「立て。あなたはどのようにひれ伏しているのか。」**

ヨシュアは地にひれ伏して、主に祈ったことが分かります。ひれ伏すこととは、礼拝を

も表わすものです。けれどそのときは、主に祈るべきとき、礼拝すべきときではなく、罪が清められなければならないときでした。ですから、主はヨシュアに、「立て。もうひれ伏さなくても良い。祈らなくても良い」と言われたのです。そのときそこには、不従順、盗み、隠し事があったのです。そのようなものがあった場合、もはや祈ること、礼拝することは全く意味がないことです。形式的なものに過ぎないからです。

私たちの場合はいったいどうでしょうか。いかに多くの不従順を告白しなければならないことでしょうか。何と多くの盗みを犯したことでしょうか。自分の名誉を人にまさって誇りたがったり、自分が中心になりたがったり、人間によく思われたがったりすることなどは、すべて聖書によると盗みなのです。なぜなら、すべての誉れと栄光はただイエス様のみ帰されるべきです。また何と多くの隠し事、偽り、偽善などを行なっていることでしょうか。もしそうなら、敬虔な形をしていてもその実を否定する者になる、と聖書は語っているのです。

もう一箇所、出エジプト記 14 章。モーセについての箇所です。

出エジプト記 14 章 15 節

**主はモーセに仰せられた。「なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか。イスラエル人に前進するように言え。」**

モーセは主に叫びました。そして主はモーセに仰せられたのです。「いったいどういうことか。なぜあなたはわたしに向かって叫ぶのか」。確かに主に叫ぶべきときがありますが、このときは叫ぶべきときではなく、主は全き従順を待ち望んでおられたのです。

今まで述べたことを通して、私たちは自分の思いや自分の行ないが、いかに主の思いとみわざから離れており、違っているものであるか、ということを知ることができるのです。即ち、

- ・私たちは祈るべきときに眠ってしまう。
- ・罪を告白し、光の中に明らかにしなければならないとき、私たちは祈り始める。
- ・また、主が私たちの従順を待っておられるとき、私たちは主に叫んでしまう。

全部的外れです。これらの事実をつまびらかに知ることができたなら、主がいかに忍耐をもち、大いなるみわざによって私たちを取り扱われ、決して見捨てることをなさらないということに気がつくのではないのでしょうか。

主は私たちと違います。人間は役に立たない者、駄目な者とあまり関係を持ちたくありません。しかし主は、駄目な者を捨てられません。私たちは不真実であっても、主は変わらないお方です。

つまり、私たちが祈らなければならないときに眠ってしまったり、罪を告白して明らかにしなければならないときに祈り始めたり、主に従順でなければならないときに叫び出したりするなら、そのときにはもはや主との交わりを持つことができないことを、知らなければなりません。

これらの事がらは、私たちが主と結びついていないことの証拠です。そのときには、主との生ける交わりもなく、また御霊による導きも存在していません。私たちが罪を光の中にさらけ出し、それを主のみもとに偽らずにありのまま差し出すことをしなければ、祈ることも、主に呼ばれることも、何の価値もないのです。私たちが全く妥協せず主に従うなら、必ず主は答えてくださいます。そうでなければ、主はお答えにならないのです。

もう一つの実例を見てみましょう。ヨナ書の4章です。

ヨナ書 4章11節

**「まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」**

人間だけではありません。家畜のことも主は言われました。みなさん覚えていると思うのですが、何年前かに津波で16万人くらいの人がいっぺんに死にました。しかし、人間はいのちを失ったのですけれど、動物が死んだという話は聞いていません。海岸のすぐ近くには大きな動物園があったそうです。けれど、象も、虎も、獅子も、うさぎも死ななかつたそうです。それはみんな早めに逃げたからです。死んだ魚も一匹もなかつたのです。人間よりも動物は、近づく危険が早めに分かり、逃げたのです。不思議なことではないでしょうか。

ニネベにいる家畜は、主にとってどうでも良かったのではありません。ましてや、主の愛の対象である人間の死の滅びを望まれる神は存在しません。主はニネベに住む十二万人以上の人々に対して無関心であられなかつたのです。ですから、預言者であるヨナは遣わされたのです。

彼は、預言者、即ち主のしもべでした。「預言者の特徴」は何であったかと言いますと、「みことばを宣べ伝える」ことでした。自分の思いではなく、聞いたことばを宣べ伝えることでした。おそらく、今日出席している中の半分以上の人々はドイツのミヘルスベルクまで行ったことがあると思いますが、みな、何度も何度も壁にかかっているみことばを読んだでしょう。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」。やはりこの態度をとることは、本当に大切です。

このことばは、若いサムエル、少年であるサムエルの祈りであったのです。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」。彼は心からそう思いました。この態度をとった人々はみな、大いに祝福されましたし、用いられたのです。今年はじめて気づかされてびっくりしたのですが、これは普通の人間のとるべき態度ではなく、これこそがイエス様の毎日とられた態度だったので、「お父様。語ってください。しもべは聞いております」。

イエス様は、一秒たりともご自分で考えたり、行動なさったことがなかったのです。自分の思いではなく、みこころだけになるように、と。「お父様。語ってください。しもべは聞いております」。この態度をとることこそ、考えられないほど大切なことなのです。

昔の預言者たちは、そのような人々だったのです。「主よ。お話してください。しもべは聞いております」。つまり、「しもべは従うつもりです。あなたのみこころだけを行ないたいのです」。この心構えこそ、預言者たちのとった態度でした。

預言者たちは、自分でいろいろなことを考えたり勉強したり、そして結果としてすべてをまとめて話しました。書いたのではありません。預言者たちは主の口として用いられた器に過ぎなかったのです。主はこのように語られ、これを宣べ伝えよと命令なさったので、彼らは主の命令どおりに行なったのです。預言者であるしもべたちにとって大切であったのは、自分で考えることではなくて、「従順に従う」ことでした。

確かに預言者たちはみな、イスラエルのために遣わされた人々でした。特別に選ばれたユダヤ人に遣わされた者でした。しかし例外もありました。ヨナという預言者は、イスラエルの民にではなく、異邦人に遣わされました。ですから、問題になりました。ちょっと1章を読んでみましょう。

ヨナ書 1章1節から3節

**アマタイの子ヨナに次のような主のことばがあった。「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。彼は、タルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払ってそれに乗り、主の御顔を避けて、みなといっしょにタルシシュへ行こうとした。**

「しかしヨナは、…」今度は悲劇的なことになってしまいます。

悲劇的な報告です。確かにこの箇所を見ると分かります。ヨナは非常に急いだのです。どうしてでしょう。主を礼拝するためだったのでしょうか。王に呼び出されたのでしょうか。決してそうではなく、彼は「主の御顔を避けて」、タルシシュへ逃れようとしたのです。結局逃げたのです。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」ではないのです。ちょうど逆のことを言ったのです。主の使命がヨナにとって重すぎ、大きすぎたのでしょうか。主のしもべであるヨナは、「主とは違った考えを持っていた」のでしょうか。そのとおりです。

ヨナ書 1章1節

**アマタイの子ヨナに次のような主のことばがあった。**

ヨナに主のみことばが与えられたことが分かります。主のみことばは一つの事実であり、主のみことばが行ないであり、また出来事です。主のみことばが望んでおられたことは、ヨナに対して行なうこと、ヨナとともに行なうこと、ヨナを通して行なうことでした。

ヨナ書 1章2節前半

**「立って、あの大きな町ニネベに行き、これに向かって叫べ。」**

と、主ははっきり命令なさいました。これは単なる提案ではなかったのです。「...しなさい」と命令でした。

どうして彼は遣わされたのかと言いますと、

ヨナ書 1章2節後半

**「彼らの悪がわたしの前に上って来たからだ。」**

大きな町であるニネベはわざわざでした。主はヨナを立たせて、その町に向かうことを望まれたのです。「主なる神の怒りが近づいている」。ヨナはそのことを警告し、説教するように急ぐべきでした。主はニネベを戒めたく思われ、また注意することをも望まれたのです。主は、大きな町であるニネベに対して憐れみをもっておられました。

そのとき、ヨナの態度はひどいものでした。近づいて来る神の怒りと滅びゆくニネベの町に対して、彼は全く無関心でした。主がヨナに「行け」と命令なさいました時、彼は「はい。行きます」と答えようとしなかったのです。彼のはっきりとした態度は、「主よ。嫌です。行きたくありません。イスラエルの民のためなら何でもします。けれど異邦人のためなら嫌です。行きません」。主は、ご自分のしもべを用いたく思われましたが、そのしもべはそのことを好まなかったのです。「嫌です」。これこそ、神のしもべの気持ちの表われでした。

この叫びと招きは、私たちにももちろん向けられています。救いと赦しを与えようと望んでおられる主は、招いておられます。「わたしのために行きなさい。あなたは、福音をまだ誰も伝えていない人々に宣べ伝えることを、勇気を出して敢えて行なうべきです。逃げ！警告せよ！叫べ！主の御名によって行け！」と。主はあなたを用いようと望んでおられます。

ヨナ書 1章3節前半

**しかしヨナは、主の御顔を避けてタルシシュへのがれようとし、立って、ヨッパに下った。**

主の御顔を避けて逃げることは本当に悲劇的です。危険です。他の事例もたくさんあるのです。

例えば、創世記4章16節を読むと、次のように書かれています。

創世記 4章16節

**それで、カインは、主の前から去って、エデンの東、ノデの地に住みついた。**

カインは弟を殺しました。カインも「主の前から去って」行ってしまいました。本当の意味で悔い改めたのに。

ヨブ記 1 章 1 2 節に、悪魔、サタンについても同じことが書かれています。

ヨブ記 1 章 1 2 節

**主はサタンに仰せられた。「では、彼のすべての持ち物をおまえの手に任せよう。ただ彼の身に手を伸ばしてはならない。」そこで、サタンは主の前から出て行った。**

カインは主の前から去って行きました。悪魔は主の前から出て行きました。神のしもべであるヨナも、同じことをしてしまったのです。

彼は、タルシシュ行きの船を見つけました。それは、ヨナにとって願ったりかなったりでした。船があるのだから、みこころではないか。導きではないか。主はヨナの通り道を本当に好都合にしておられるのでしょうか。主はご自分のしもべの不従順に対して、それで良いとおっしゃるのでしょうか。もちろん、そのようなことはあり得ません。

彼はタルシシュ行きの船を見つけ、船賃を払った、とあります。この船賃は高いものでした。タルシシュまでの距離は、ニネベまでの距離よりも三倍も遠くでしたから、船賃もニネベに行くよりは三倍も高かったでしょう。このように、主の御顔を避けると、多くの費用を費やさなければなりません。この高い費用を払うということは、もちろん、決してただ金銭的な意味だけではないでしょう。「安らぎ」、「平安」、「喜び」、「幸せ」など多くのものをも、犠牲にしなければならないのです。「主の御顔を避ける」とときには、多くの費用を払わなければならないことを覚えるべきでしょう。

ドイツの一つの歌の内容を紹介しましょう。

「主は、今日も招いておられます。心の備えをなさい。主の招きを避けようとするのですか。主の御顔を避けようとするのですか。失われた者たちのために、犠牲を払おうとは思わないのでしょうか。もはや本当の喜びをもちたいとは思わないのでしょうか。主なる神に対して常に拒み続けるのでしょうか。主は、今日も招いておられます。心の備えをなさい」。

もう一節。

「主はここにおられます。主に対して従順に『はい』と言いなさい。主に自分のわがままな意思を明け渡しなさい。そうすれば、主はあなたの心を静め、主ご自身の平安で満たされるのです。自分の意思を行なう者は、決して神のみこころに安んじることはありません。主はここにおられ、あなたの心からの返事を待っておられます」という歌です。

ヨナは、「主の御顔を避けて」タルシシュへ逃れようとした。そしてヨッパに下った、とあります。ヨナ書にもどりまして、

ヨナ書 1章5節後半

### ヨナは船底に降りて行って

とあります。

ヨナはヨッパに下り、船底に降りて行きました。ヨナが、いつも下へ、下へと向かっていることが分かります。

私たちの心の奥底を最も揺り動かすものはいったい何でしょうか。ひたすらイエス様を第一にする、ことでしょうか。主にだけ従っていく心構えをもっているのでしょうか。

「従っていく心構え」のできていない者は、たちどころに主から引き離され、下へ下へと落ちていくのです。

ヨナ書 1章4節、5節前半

そのとき、主が大風を海に吹きつけたので、海に激しい暴風が起こり、船は難破しそうになった。水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。

たしかに「主が…」と書くべきです。偶然に起こったことではありません。主のせいでした。嵐がやって来ました。激しい暴風が起こりました。暴風は、主によって遣わされたものであり、逃げようとする神のしもべであるヨナを捕えるためになされたものです。

水夫たちは非常に驚き恐れしました。大声で叫び、またひざまずきました。そして、船の積荷を海に投げ捨てました。(もったいないことをしました。) どうして私たちは滅びなければならないのか。いったいこの原因はどこにあるのか、と異邦人たちは尋ねました。はたして偶然に起こったことなのか。はたして運が悪かったのか。不幸な出来事に過ぎないのか。いったい誰のせいなのか。自分のせいなのかと彼らは口々に叫びました。けれど、ヨナはそのように問いませんでした。

私たちは、困難や病気、その他理解しがたいことが起こった場合に、いったいどうしてか、なぜかと思うようになります。あの見知らぬ者はいったいどこにいったのか。水夫たちはヨナを捜しました。そのときヨナは船底で横になり、ぐっすり寝込んでいたのです。神のしもべで、預言者であるヨナは、ぐっすり寝込んでいたのです。ヨナは使命をもっていたにも関わらず、寝込んでしまいました。多くの人々が危険な状態にあるときでも、神のしもべであるヨナは眠っていたのです。上では暴風が荒れ狂っているときに、彼は船底でぐっすり寝込んでしまったのです。そして、6節はなかなか良いことばです。

ヨナ書 1章6節

船長が近づいて来て彼に言った。「いったいどうしたことが。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」

異邦人である船長のことばです。ヨナは気がつかず、何も知りませんでした。当然です。眠っている者は聞くこともできないし、見ることもできないし、知りたいとも思いません。ヨナは、主の御声を聞こうとはしませんでした。「主よ。語ってください。しもべは聞いております」というようなかつての気持ちを、ヨナはなくしてしまったのです。悩み、苦しんでいる人々に目を留めようとしなかったのです。なぜなら、彼は主の御顔を避けて逃げてしまったからです。

私たちはいったいどうでしょうか。私たちも主から逃避しているのでしょうか。ヨナと同じように、半分くらい眠っているのでしょうか。苦しみ、悩み、困っている状態の中で主の御声を聞きたいと思わないでしょうか。船長は聞きました。

ヨナ書 1章6節、7節

船長が近づいて来て彼に言った。「いったいどうしたことが。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない。」みなは互いに言った。「さあ、くじを引いて、だれのせいで、このわざわざが私たちに降りかかったかを知ろう。」彼らがくじを引くと、そのくじはヨナに当たった。

すべてはヨナのせいでした。水夫たちには何の責任もなかったのでしょうか。水夫たちも同じく罪人ではなかったのでしょうか。水夫たちはヨナよりも罪が軽かったのでしょうか。ヨナは預言者であり、主のしもべでした。けれどそれにも関わらず、彼は主の御顔を避けて逃げました。ですからここにいわゆる不幸が起こったのです。水夫たちは「告白せよ。言いなさい。いったいどういうことか」と、ヨナに言いました。このように聞かれると、もう逃げられなくなりました。これこそが逃避の最後でした。

主から遣わされた嵐はヨナを捕まえました。異邦人たち、主を知らない人たちは、ヨナに告白を迫りました。ヨナは、それ以上逃げることはできなくなってしまったのです。

逃避はしかし主の御手の中で終わりました。これこそ「恵み」なのではないでしょうか。いかなるものも、主なる神の前から逃げ切ることはできません。

- ・主は船長のことばを通して、ヨナを明るみに出されました。
- ・主は女中の指差しによって、ペテロを明るみに出されました。
- ・主はナタンという預言者を通して、ダビデを明るみに出されました。
- ・主は天の光を通して、ダマスコに向かうサウロを明るみに出されました。

私たちも、もう既に明るみに出されたのでしょうか。こんにち明るみに出されることを望んでいるのでしょうか。私たちは、主によって見つけ出され、明るみに出されることを望むのでしょうか。隠さず告白しようではありませんか。

いったいヨナは何を告白したのでしょうか。彼ははっきり、「私は主なる神によって特別に選ばれた民に属する者です。私はすべてを造られた栄光の主に出会いました。私は海と陸を造られた天の神、主を礼拝する者になりました。私は滅びゆく人々に対してさばきが臨む前に警告するようにと召された者です。けれど、私は神に対して不従順であり、主の御顔を避けて逃れようと思いました」と。

ヨナは、自分を言い繕うことをせず、すべてを告白したのです。すべてが自分のせいであることを率直に認めました。ヨナは主に対して、人間に対して債務を負っていることを認めたのです。ヨナは自分が死に値する者であり、死に当たる債務を負っている者、死の判決を受け、海の中に投げ込まれることを良しとしたのです。罪の支払う報酬は死です。けれど主は言うておられます。「わたしは悪者の死を喜ぶだろうか。彼がその態度を悔い改めて生きることを喜ばないだろうか」と。

その後、ヨナは何を経験したのでしょうか。彼は死の谷を通過して来ました。主は、彼から多くのものを奪い、多くのものを与えられたと言えます。いったい何を奪われたのでしょうか。

ヨナは、ヨナのわがままな意思、不従順、盲目であること、自分の力といわゆる自信を奪われました。では、主は彼から何を取り上げられなかったかと言いますと、与えられた使命です。いったい何が与えられたのでしょうか。彼は、主の光によって、自分の本当の姿を見ることができ、完全な赦しと恵みに預かることができるようになったのです。主にどうしても従いたいという意思でさえも与えられ、そのために使命を果たす力を得ることができたのです。

ヨナは船から海へ投げ込んでもらい、それによって多くのものを得ることができました。私たちもヨナと同じように、自分のわがままな意思、不従順、盲目であること、自分の力といわゆる自信を投げ込もうではないでしょうか。

ヨナ書 3章1節、2節

**再びヨナに次のような主のことばがあった。「立って、あの大きな町ニネベに行き、わたしがあなたに告げることばを伝えよ。」**

ニネベは取りも直さずこの世の象徴です。この世は非常に大きなものであり、何百万人という救われていない人々が生活しています。主はこの世を愛しておられるのです。

ヨハネ伝3章16節。みな覚えているでしょう。

ヨハネの福音書 3章16節

**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**

主はそのために御子を死に渡されました。イエス様は何百万という人の罪の報いを受けてくださいました。

テモテへの手紙・第二 1章10節後半

**キリストは死を滅ぼし、福音によって、いのちと不滅を明らかに示されました。**

とあります。

また、よく知られているローマ書6章23節。

ローマ人への手紙 6章23節

**罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。**

ヨナは、滅びゆくたましいに対する主の大いなる愛を知り、一日中歩き回って、恐れることなく、主のみことばを宣べ伝えました。

ここで質問です。どうしてヨナは人間を恐れなかったのでしょうか。答えは、彼は死の谷を通過して来たから、自分自身を捨てたから、全く妥協せず主に従うようになったのです。

今の時とは、「恵みの時」と呼ばれています。こんにち自分の罪を明るみに出し、赦しを受ける者は救われます。しかし、恵みの時は限られています。「恵みを受けなさい」。これこそが、喜びの訪れ、即ち「福音」そのものなのではないでしょうか。

二ネベでは何が起こったのでしょうか。二ネベは罪を悔い改めました。恵みの神に呼ばわれました。二ネベは立ち返りました。さばきに陥ることなく、恵みにあずかることができました。主は一人でも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられます。

最後に、もう一箇所読んで終わります。

テモテへの手紙・第一 2章4節から6節

**神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。**

私たちは、本当に主が願っておられること、望んでおられることを理解しているのでしょうか。主は、「愛」と「救い」を提供したく思っておられます。主は、自分自身を捨て、主の愛によって救いを得させるしもべを求めておられます。

二ネベは私たち一人一人を必要としています。この世は滅びに向かって進んでいます。大変な速さで。二ネベは、ある場合にはあなたの家庭であるかもしれませんが。職場であるかもしれません。主についてのはっきりとした証しを、公にすることは恥ではありません。

パウロは書いたのです。

ローマ人への手紙 1章16節前半

**私は福音を恥とは思いません。**

福音とは、「イエス様」です。パウロは、私はイエス様を恥とは思いません、と。

このパウロに与えられた使命は、私たちに与えられている使命なのではないでしょうか。ですから、パウロはこのローマにいる人々に書いたのです。

ローマ人への手紙 13章11節

**あなたがたは、今がどのような時か知っているのですから、このように行ないなさい。あなたがたが眠りからさめるべき時刻がもう来ています。というのは、私たちが信じたころよりも、今は救いが私たちにもっと近づいているからです。**

「救い」即ち、再臨なさる救い主です。

私たちはどのような態度をとるべきでしょうか。イザヤのとり態度ではないでしょうか。

イザヤ書 6章8節

**私は、「だれを遣わそう。だれが、われわれのために行くだろう。」と言っておられる主の声を聞いたので、言った。「ここに、私があります。私を遣わしてください。」**

このような態度をとる者は、驚くばかり用いられ、祝福されるに違いありません。

了